

越後街道探索 (その2 西会津編—東松峠について)

川島隆義 鈴木幸治¹⁾ 栢森宇一郎²⁾ 眞田博之³⁾

1) 峠道を行く

越後街道の会津若松～津川間には主に東松^{たばしねまつ}、車^{くるま}、鳥井^{とりい}の三つの峠がある。これらの峠道は昔も今も大きな変わりはない。難所というほどではないが、馬同士がかみつくような駄馬を雇って越えた者も多い。今回は東松峠について記してみたい。

東松峠は会津若松から西へ23kmにある。旧街道を行くには、ほぼR49号に沿って会津坂下^{ばんげ}から塔寺^{とう}—気多宮^{きみや}—県道43号に入り、船渡^{ふねわた}へ出て只見川を越え片門^{かたかど}—天屋^{てんや}とたどる(図-2)。ここから先、5万分1地形図には2本の細い山道が示されている。



写真-1 東松峠の会津側入り口(車の後方)

我々は会津側とは逆に新潟側の軽沢集落から東松峠を目指した。だが、

峠への入り口が分からず、やむなく峠の往復を避けるため2台の車を使い1台を軽沢集落に置き1台で坂下町側へ出て東松峠を目指した。天屋集落の裏山を登ると東松峠への入り口があった。登り口の枯れ草の中に立て看板が倒れているのを見つけた。これに東松の謂

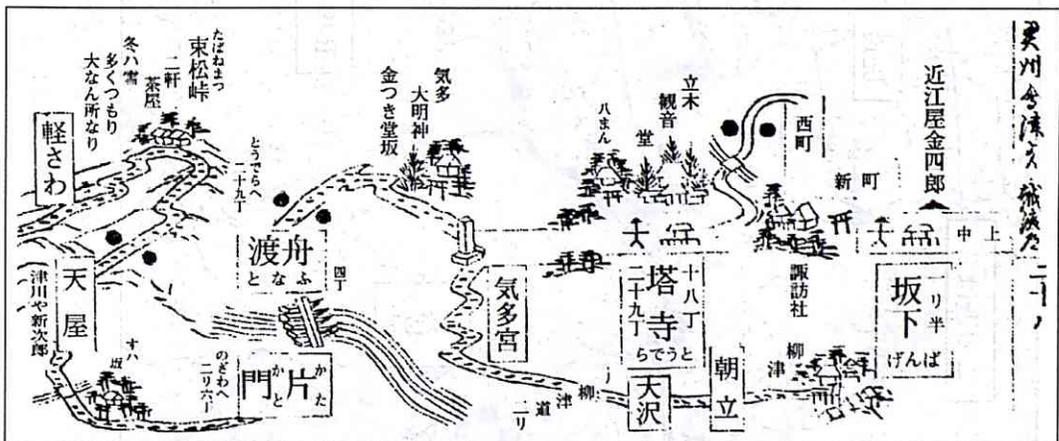


図-1 街道絵図 坂下から軽沢付近まで(会津坂下町教育委員会による)

¹⁾新潟大学積雪地域災害研究センター ²⁾旭調査設計株式会社 ³⁾三菱マテリアル資源開発株式会社

われが記されている。東松は既に江戸時代から知られており、地名もこの特殊な赤松に由来するという。

「東松の説明板」

天屋の束松^{たばねまつ}

福島県指定天然記念物、

昭和四十二年十二月八日指定

天屋の束松峠地帯には樹幹の下部から中部にかけて多数の枝を出し傘状の樹冠を形成する特殊な赤松が生育する。この束松の樹形は遺伝的なものと考えられ、樹形のみごとさと学術上の価値から代表的なものを指定し保存をはかっている。

昭和四十二年十二月

福島県河沼郡会津版下町

「西会津町史」に越後長岡藩士 長沢茂久と柳町年綱による道中日記がある。これによると、享和三年（1803）旧暦2月13日に津川を発って会津に向かうが、2月14日は終日雪が降り難渋している。それでも昼頃、上野尻をでて芹沼、野沢、綱沢^{つなまわ}を経て東松峠に向かった。我々と逆のコースである。

右に柳津虚空蔵へ通る追分けの石をみて
軽沢村に至る。夫よりたばね松峠にかかる。
登ること易き峠也、絶頂に茶店あり、此日
雪降り霞深くして山々更に見え分たず
こころあらバ晴れ上陸奥路の八重霞
など口吟ミ、しばらく休らううちに少しあ
かるくなりて見おろしの村々山々など尋問
待りて峠を下る、峠半にして左りの松林の
中に一ト木異なる松樹ありて、下枝より木
末までたばねよせたるごとく、たとえバ杉
の木に松の葉を植えたる姿なり、多くの松
の中によく見える。謂れもありやと所の者
に問えば、ひなずる姫の事いろいろ取添て
語れ共、これひなずるが義経をしたひて下
りしは此海道にあらず、いぶかしければ是
を記さず、此眺望は近国に希なる景色なる
べし、夫より壱里計行きて片カド村に至る、
此間にあやしき村建つ、武拾軒計りあり、
右側を本名村といへ左側を天屋村という、
わずかの一村両側にて其名を分つ、さて片
カドの船渡して上れば町並みあり、船渡村
といふ、（以下略）

日記の棒線で示した「柳津虚空蔵へ通る追分け石」は東松と柳津^{やないづ}へ行く街道の分岐点である。今もこの場所は別茶屋^{わかちや}の地名が残る(写真-9)。柳津へは別茶屋から49号を1kmほど会津へ向かうと右に折れる道がある。これが柳津道である(現県道342号)。東松峠を嫌ってこの路を下り、只見川の右岸に沿って会津坂下に出ることもできる。ただし、只見川を渡らなければならず、増水に遇うと足止めされた。左岸に路は無かったが明治以降、地元の篤志家が自費で道路を建設している。「柳津虚空蔵」は柳津円蔵寺の福満虚空蔵尊のことであろう。この寺は文政元年(1818)焼失し、その後再建されている。

日記の「左りの松林の中に一木異なる松樹ありて」という「異なる松樹」とは東松のことでこの子孫である子東松が峠の中程に繁茂していた。ところが平成8年、枯れて切り倒された。保存の目的で輪切りにし、殺虫剤を撒き、透明の厚いビニールシートでくま

まれていた。我々が見た時はシートが破れて路傍に雨さらしになっていた。

現地の案内板によれば東松とは『標高300m前後に十数本見られ、樹幹の下部から中部にかけて50~80度の角度で急傾斜する多数の枝を出し、傘状の樹幹を形成する。枝の急傾上するさまがあたかも東ねたような姿を示すので東松の名がついたのであろう。このような形状はおそらく遺伝的なもので成長するにしたがって独特の樹形をしめすようになったと思われる』

現存するこの特殊な松も代を重ね子東松や孫東松と呼ばれている。環境の変化で生育が難しく、保全には大変な手間暇がかかるようである。写真-3は虫食いで切り倒された子東松の切り株である。1本の幹に年輪が三つある。旅日記には東松の謂われをたずねたが“ひなずる姫”のこを言われたのでこの海道(街道)のこととは異なり変だと思って日記には記さなかったとある。ひなずる姫とは、京の鬼一法眼の義理の娘「皆鶴姫^{みなつるひめ}」のことであろう。皆鶴は義経を慕って米沢街道(現R121)の河東町まで来て病に倒れ、難波池に身を投じたという(新編会津風土記)。



写真-2 峠入り口の東松



写真-3 子東松の切り株

文化十三年（1816）に書かれた十辺舎一九の「^{かねのわらじ}金草鞋」にもこの峠が記されている。

「それより一里半ほどゆきてかたかど（片門）のしゅくにいたる、それよりたばねまつといふ

とうげにかかり、いたってなんじょ（難所）なり、ゆきゆきてとうげにいたればここにちや屋二

けんあり、しけたるものをうる、また小鳥のやきとりめいぶつなり」

二軒の茶屋があり小鳥の焼き鳥が名物であったという。また、峠道について長岡藩士は「登ること易き峠」といい、十辺舎一九は「いたって難所」と記している。人によって山道の評価が分かれる。



写真一 4 天屋側の登り路

落ち葉で“ふかふか”だがその下には石畳が残されている。幅3m、車の通行は禁止されている。この右手下に新道（県道342）があり、農耕車両などはそちらを通る。左から鈴木、栢森、鷲田の諸氏



写真一 5 峠頂部の茶屋跡

今は休憩場になっている。晴れた日には磐梯山や会津城下が一望できる。茶屋は二軒あって昭和30年頃まで営業していた。焼き鳥が名物だったらしい。茶屋跡に銅製の七輪が埋まっていた。盛土して用地が造られている。

茶屋は無くなったが、二軒の茶屋の土台（基礎）がその跡をとどめている（図-3）。

茶屋跡②の中央には七輪の他、骨董的な瓶も埋まっていた。南東側に石積みの土留めが

ある。北側は切土斜面になっている。この切土した土砂を使って南の斜面に盛土し、敷地を造成して見晴らしの良い茶屋が造られたものと思われる。

東松峠を地形図で見ると南北に1kmほど離れて2本の並列した道が描かれている。我々の踏査した範囲では北側の道は見つけることができなかった。南側の道は全長約2.5km、最高所で標高400m、天屋、軽沢など周辺集落との比高は100m前後である。

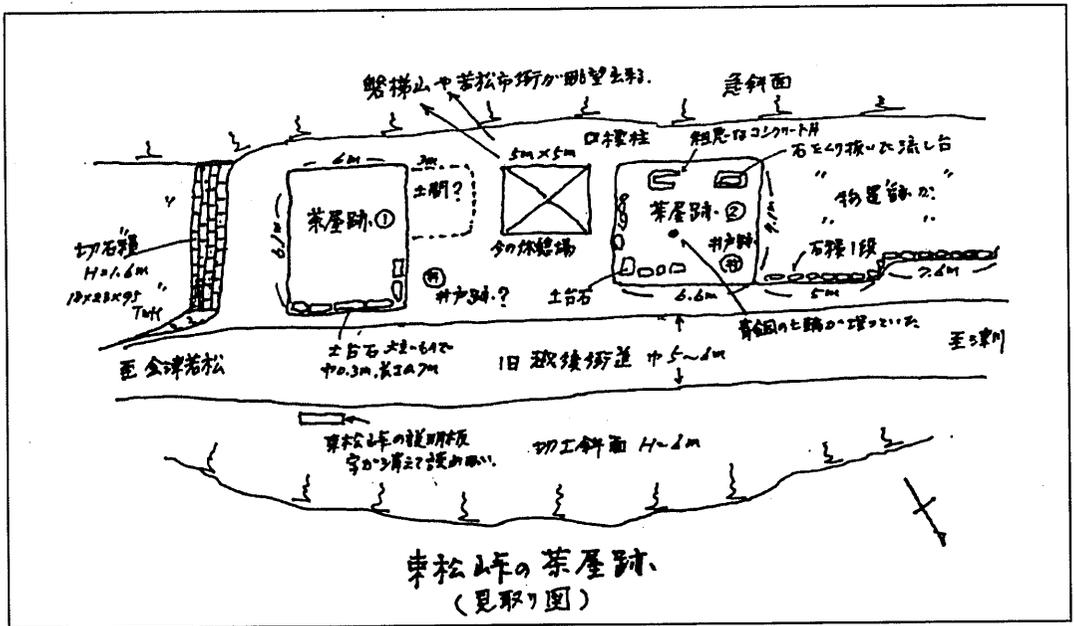


図-3 峠の茶屋跡

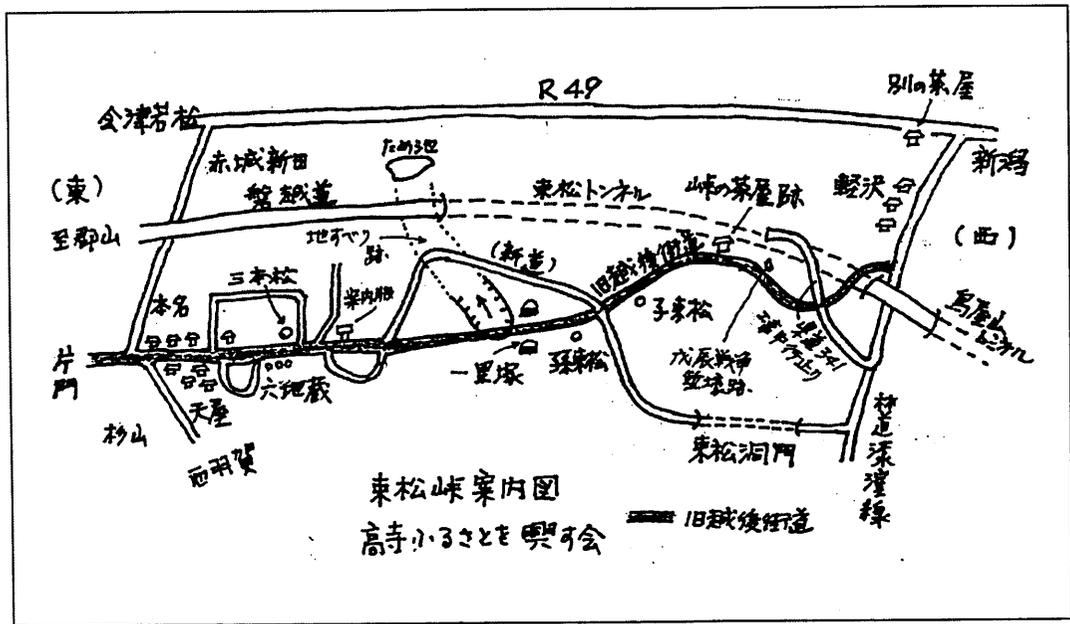


図-4 東松峠案内図写 (一部加筆)

峠の中程に巾80m、落差15m程、街道が欠落している。これは地すべりによるもので(図-4)、その地形は南東に広がっており、ここが地すべりの冠頭部であることが分かる。立て看板があり、大正14年に発生したことが記されている。

立て看板に書かれている「本名村荒田堤」は今もため池として使われていて木の間隠れに湛水を見る事が出来る。どのような対策工事をしたか明かでないが地すべりが拡大した様子は見られない。峠道は地すべり冠頭部を急降下し、しばらくして急な登りになる。滑り止めに丸太が階段状に敷設されている。

急な階段を登りきると道の両側に立派な一里塚が現れる。塚は道の両側に一つずつありこれらで対である。それぞれ締め固めてある。

塚の底辺の直径は5m程であろうか、図-1の左端に黒丸が2つ道をはさんで描かれているものがある。これが此処の一里塚である。一般に一里塚と呼ぶが、ここではこのようなものを「いちりだん」というらしい。



写真-6 東松峠の一里塚

一里塚を我々はまだ見ていない。福取の「うりわり峠」や常浪川近くの「天満」には杉の大木が一里塚頂部にそびえている。

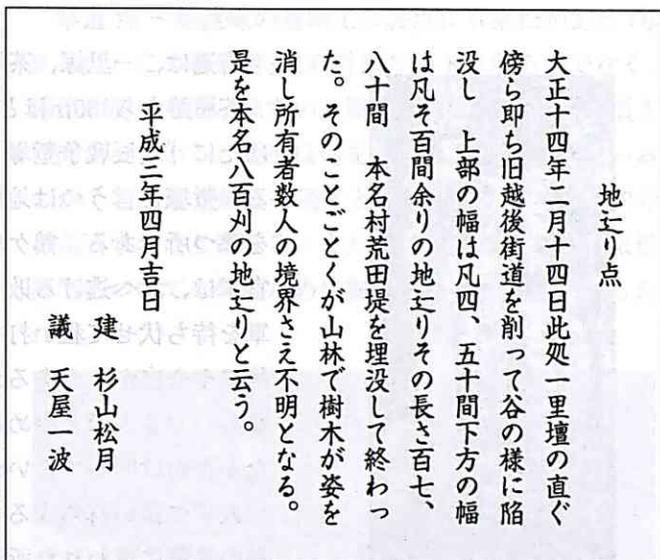


図-5 地すべりを示す立て看板

地すべり点

大正十四年二月十四日此処一里壇の直ぐ傍ら即ち旧越後街道を削って谷の様に陥没し 上部の幅は凡四、五十間下方の幅は凡そ百間余りの地すべりその長さ百七、八十間 本名村荒田堤を埋没して終わつた。そのことごとくが山林で樹木が姿を消し所有者数人の境界さえ不明となる。是を本名八百州の地すべりと云う。

平成三年四月吉日

建 杉山松月
議 天屋一波

一里塚は越後街道（会津街道）で江戸後期には19～20カ所有った。現存するものは8～9カ所程度である。道路の開発などで土塊つちくれになってしまったものがほとんどである。一対あるべきものが片側だけになった所もある。



写真一七 会津軍塹壕跡

街道は、一里塚、茶屋跡を過ぎると下りになる。

茶屋跡から150mほど行くと直角に右へ折れる。その道ばたに『戊辰戦争塹壕 会津軍塹壕』と書かれ標注がある。塹壕と言うのは地面に溝を掘り、兵士が隠れて鉄砲を撃つ所である。鶴ヶ城が陥落すれば南から攻め込んだ官軍は、北へ逃げる敗残兵を追ってここを通る。その官軍を待ち伏せて狙い打ちするわけである。この塹壕は背後にやや広がりがあるが、街道脇の凹地を利用したようなもので5人ほど潜めば満員になる。実際に戦闘があったか否かは明かでないが、狭い峠道を下ってくる官軍を一人ずつ狙い打ちすることは容易である。写真の標注背後の笹藪に覆われた所が塹壕である。

休憩場の天井に会津の家臣あきづきかねひさ 秋月胤永（秋月悌次郎）が読んだ漢詩が掲げてある。

「行無興兮帰無家 国破孤城乱雀鴉 治不奏功・・・」

戊辰戦争の敗路、この峠から遙か若松城を望みつつ会津の行く末を案じて読んだものであろう。「行くに興なし 帰るに家無し・・・」

路は緩やかな下りが続きしばらくして建設途中の県道341 別～船渡線に出た。まだ軽沢の集落に到達していないのだが旧街道はここで無くなっている。県道341はここから左へ少し登ると行き止まりになる。旧街道を探すとガードレールの向こうにブッシュに覆われた細道があった。ガードレールを乗り越えて行くと幅2m程度の路が続いている。一部は沢の侵食で崩れていて幅は50cm位になっている。東松峠の案内図では工事中の県道が旧街道になっていた。あるいは県道工事で旧街道は拡幅し舗装された可能性もある。しかし、我々は藪路を旧街道と信じて下っていった。やがて水路のような切石川源流部の鉄板橋を渡り軽沢集落の東に出ることが出来た。

実は、軽沢集落から峠へ登りたいと考えていたので、事前に越後街道のことを2～3人に尋ねたのだが、耳が遠い老人（御免）であったり他から嫁いできた夫人だったりして正確な峠道の情報を聞くことができなかった。これに対して、天屋側の人たちは東松峠のことを良く知っており、我々の質問に応答してくれた。東松峠の頂上付近に町村界が通って

いて東側は会津坂下町、西側は西会津町になっている。この町村界が東松峠に対する認識の違いを生じさせているのだろうか、坂下町側は旧街道に関心を持っているが、西側の軽沢で同じような熱意は感じられなかった。



写真一八 軽沢集落側の東松

県道^{わかれ ふなと}別～船渡線の道路工事終点にも東松がある(写真-8)。この新県道341の計画ルートは明らかでなく、道路地図にも表示はない。県道の方向は東松峠の頂きに向かっている。新道は何を目的として作られているのか？名称通り船渡へ通すとすれば峠の南で現R49号と並列することになる。また、図-4にしめした東松洞門についても何のために掘られたものか疑問がもたれた。



写真一九 別茶屋橋脚は大正年間に作られた反場橋跡(木橋)右はR49号線



写真一〇 軽沢集落(中央に水路が通る)

後日、坂下町を尋ねて疑問を伺う事にした。坂下町役場で用件を話すと農林振興課に通された。そこで長谷川 登氏に面会する。氏は東松峠の保存会の会員でもあり熱心に話をしてくれた。東松洞門は難渋な峠道に代わって軽沢と天屋・本名の両端集落を結び、船渡から若松に至る車馬の通れる輸送路をめざして地元民の手で開削され、明治27年に全長130間(230m)が貫通した。施工にあたって集落間で賛否の声があったという。

この洞門は県道342号として旧街道と並列する峠の新道に連結する計画であった。しかし、集落への取付け道路や覆工などは未完成でトンネルは素掘りのままである。完成直前に今のR49号線藤トンネルが開通し、洞門の必要性が無くなり工事がうち切られた。一方、新国道の開通で幾年続いた軽沢と本名・天屋の宿場は、行き来する人が途絶え、それぞれの集落が持つ宿場としての機能が無用となった。このため両端にある集落は山腹に孤立し、従来の生活が立ちゆかなくなった。施工途中の新県道341号もこれらの事情をふまえ洞門に変わるものとして手が着けられたと思われた。しかし長谷川氏曰く、その辺のことは県の担当なのでよく分からないとのことであった。私は東松峠の案内板に描かれている洞門が気に入り「中に入って見たい」と告げた。しかし氏は「今、中がどうなっているか分からない、自分としては入って良いとは言えない」とのことであった。

2) 洞門に入る

洞門がどのようなものか知りたかった。事前調査とし斥候役を買い天屋側の坑口を見ることにした。旧街道の子東松付近に切り通しがあり新道が交差している。この新道を北へ20分ほど崖縁を歩いてゆくと「洞門」という標識が中空にぶら下がっていた。やがて坑口に行き着く。坑口は斜面の風化による崩落土砂で半分以上が埋まっていた(写真-11)。内部は丸太の支保工が見られるが朽ちており天端からの崩落があり断面が拡大している(写真-12)。だが人が入って行けそうである。しかし、明かりも持たず一人では危険で、坑口だけ確認してその日は引き上げた。後日4人で探索することにした。

平成16年5月4日(雨)
我々4人は装備を整えて洞門探索に向かった。天屋側



写真-11 坑口の崩落土砂



写真-12 坑口内部の状況

の坑口に出るため軽沢口から入ることにした。事前の情報では2年前ほど前に軽沢坑口の草刈りをしたという話を聞いていた。また、林業で山に入っていた人に聞いたのだがこの近くで坑口を見たことがあるとのことであった。しかし、幾ら探しても「軽沢の坑口」は発見できなかった。しかたなく、峠を登り反対側の天屋側坑口から入ることにした。

後に畑作業のため山に登ってきた人に聞いたのだが、軽沢の坑口は地すべりで埋まってしまったという。我々も坑口を探して山腹を歩いている時、沢の突き当たりで坑口らしい所の地すべり跡を見た。知っていれば午前中の時間を無駄にせずに済んだのにと悔やんだ。

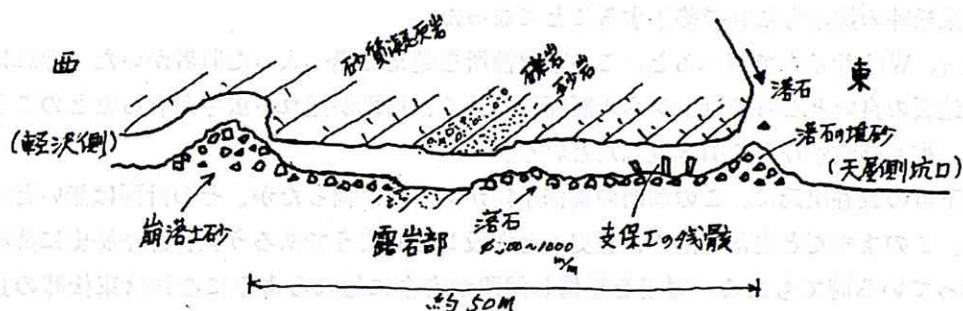


図-6 トンネル縦断図



写真-13 洞門内部の探検 (落盤で埋まっている)

持参の弁当で昼食をすませ、ヘルメットにキャップライトを着けて中に入る。洞門内部の地質は軟岩で落石が多く歩きにくい、小型のコウモリが数匹天端にぶらさがっている。落ちていた糞から推定してかなり多く生息しているようである。温度は15℃位か、奥から

冷たい風が吹いてくる。坑口から30m付近に礫岩と砂岩の互層がある。この箇所は周辺の軟岩より硬く落石はない。硬い部分に幾筋もの細い溝がみられる。手掘りによる鑿のあとであろう。内部は湿潤だが湧水はない。暗闇の中をかれこれ50m程進むと目の前に天端まで届く落石の山が現れた。落盤である。天端と落石との間にわずかな隙間がある。畠田氏がよじ登り奥を覗いたが暗闇で見えないという。何か光りでも見えれば先へ進むつもりでいたのだが、地質は亀裂質で開口しており、落盤はこの箇所以外にも有ると思われた。地震が起きたらという心配が頭をはなれない。奥から冷たい風が吹いてくるが軽沢側の坑口からではなく外気温との温度差による対流のためである。

我々はこれ以上進むのは危険と判断して外に出た。この日で洞門の探索は終了した。また、東松峠の探索もこれで終了することになった。

後日、Webサイトで調べると、この落盤箇所を越えて奥へ入った若者がいた。それによると地質の良いところではトンネル断面は四角く、馬車が通れる広さが有ったとのことである。彼も落盤がひどく引き返したという。

坂下町の長谷川氏に、この洞門の補修予定があるのか伺ったが、その計画は無いと言われた。このままだと崩落が進み、歴史ごと埋没してしまうであろう。自然や歴史に関心が高まっている時でもある。周辺を整備し洞門が安全に通れるようになれば東松峠の良きルートになり、子供や中高年まで歴史を学びつつ散策を楽しむことが出来ると思われた。人が集まることで孤立に悩む集落にも張り合いが生まれるであろう。

次回、許されるなら只見川の「船渡・片門の舟橋」、「車峠と鳥井峠」、「八木山の宿」について記してみたい。

(この巻終り)

参考資料とご協力

- (1) 「西会津町史」第7巻 宗教・文化資料編
西会津町史刊行委員会平成12年3月発行
- (2) 会津坂下町農林振興課
- (3) 西会津町教育委員会
- (4) Webサイト「街道Web」

+	⊕	⊙	⊚	▲	⊖	↑	□	凡例
比印を見て其所之方角をしるべし	御関所之印	渡し場 橋の印	御高札之印	はたご屋の印 (講指定の旅籠屋)	一里塚の印	国堺 郡さかいの印	道中筋駅々宿屋有之所の印	

図-1の凡例